



ネギ戦隊
タベルンジャー

比良岡美紀

(2013年・2014年)

スーツアクターという言葉を知っているだろうか。スーツアクターとは、「スーツを着た俳優」。このスーツは、ヒーロースーツのことだ。特撮番組に登場するヒーローたちの、変身後の姿でアクションシーンに挑む。それがスーツアクターなのだ。

俺は今、ネギ戦隊というヒーローに扮している。特撮番組の出演はないが、ヒーロースーツを着て、イベントで奮闘する毎日だ。

「ネギホワイト、がんばれ！」

子供たちが叫ぶ。尾崎は予定通り〈やられて〉いるようだ。俺は大きく深呼吸をした。間もなく出番だ。

「ネギグリーン、早く来て！」

両のこぶしを固く握った。全身に力がみなぎる。もう一度深呼吸をして、観客席を見た。子供たちの、疑うことを知らない瞳は、しっかりと尾崎、いや、ネギホワイトを見据えている。

よし、とつぶやき、ステージ上に一步を踏み出す。尾崎が振り返ってうなずいた。俺もうなずき、敵にとび蹴りをくらわす。歓声がわき起こる。敵は受け身を取って倒れ、立ち上がって戦闘姿勢をとった。

もう一人の敵は、尾崎に倒され退場した。残ったこいつが親玉だ。俺は尾崎に合図した。ステージ上でゆっくりと回りながら、技を出すタイミングをはかる。もちろん敵も了解済みだ。俺たちが動き出すと、子どもたちの声援が飛ぶ。

「がんばれ！」

「負けるな！」

「ネギグリーン！」

ふっ、と尾崎が苦笑した。自分を嗤ったのか。俺を嗤ったのか。確かめる間もなく、来い、と目の前の敵が言う。大きく息を吸い込み、俺は叫んだ。

「風邪大魔王、覚悟！」

俺と尾崎は同時にとび蹴りをくらわせた。敵は倒れ、おのれネギ戦隊と叫びながらのたうちまわる。それから右手を上げ、覚えておれ、とつぶやくと、上げた手を下ろして息絶えた。俺は奴のそばにしゃがみ、ご苦労さん、と小声で言った。マスクの下に、笑顔が見えた気がした。

「風邪大魔王は、ネギ戦隊の力で退治できました！」

会場にアナウンスが流れる。わあ、と歓声を上げる子どもたち。やったやった、と喜んでいる。本当に嬉しそうだ。

「じゃあ例のやつ、いくよ」

再度のアナウンスで子どもたちは整列し、右手を高くつき上げる。

「ありがとう、ネギ戦隊、タベルンジャー！」

子どもたちの笑顔がまぶしい。俺たちは並んで両手を上げ、ありがとう、と言いながら手を振った。そこへアナウンスの当事者が現れる。売り出し中の声優だ。

「ねえみんな、おうちに帰ったら何するんだっけ？」

手洗い、うがい、と声が飛ぶ。

(2)

「そう。手を洗って、うがいだね。そのあとは？」

そのあと？ 子どもたちは不思議そうな顔をする。大丈夫だろうか。開始前に、仕込みをしていたはずだが……。そのとき、男の子が立ち上がった。

「ネギを食べる！」

声優はホッとしたように笑う。

「はい、正解です。みんな拍手！」

男の子を囁す声にまじり、ぱちぱちと拍手がこぼれた。

「みんな、帰りにネギをもらってね。レシピはお母さんに渡してね」

はあい、と元気に返事をして、子どもたちは会場を後にした。

出口ではネギとレシピが配られる。地元産品を地元で消費する、地産地消の試みだ。地元密着のNPO、地産地消を考える会がイベントを企画、我々がネギの効用を訴え、消費を後押しする目論見だ。

「お疲れさまでした」

声優が笑顔で話しかけてきた。ここはネギ戦隊として応えよう。そう思ったとき、尾崎が割り込んできた。

「お疲れさまでした。このあと、予定ありますか？」

声優の笑顔が凍りつく。おい、と後ろから肩を叩いたが、尾崎は俺の手を払い、よかったらお茶でも、と畳みかけた。後頭部の髪の毛が乱れている。こいつ——マスクは控室で取れと言ったのに！

「お疲れさん、良かったよ」

どうも、と俺は挨拶をした。この人はNPOの会長だ。

「まあ、客の入りは今ひとつだったけど……」

そう言って頭をかく。俺はヒーロースーツを外し、ふう、と大きくため息をついた。

「引率された幼稚園児だけじゃ、客とは言えませんね」

尾崎が不機嫌そうに言う。

「そうなんだよね、一般のお客さんに来てもらわないと……。何かないかな」

「ネギをやめればいいでしょ、簡単ですよ」

「いや、でもさあ」

会長が抗議する。

「ここの特産はネギなんだから、仕方ないじゃないの」

尾崎はふっ、と鼻で笑う。

「ならあきらめることですね。一生幼稚園児を相手にしてりゃいい」

「いやそこを何とか……いいアイデアないかな」

さあね、と言ってヒーロースーツを脱ぐと、尾崎は無造作に椅子の背に置いた。置き方が雑すぎて床に落ちそうなのに、気に留める様子もない。不満そうな態度はいつものことだが、さすがに目に余る。

(3)

頼むよ、と会長は食い下がる。ねえ村田ちゃん、と水を向けられ、言葉を探す間もなく、尾崎が駄目出しを始めた。

「だいたいネーミングが悪すぎます。ネギ戦隊なんて、ふざけてるとしか思えない。しかもタベルンジャーだなんて――」

蔑むように笑い、首を横に振りながら言った。

「ありえないっしょ」

ありえない――。突然、動悸が激しくなった。

子どものころ繰り返し投げつけられた言葉だ。これを聞いたたび俺は、心臓が強く締めあげられる。会長からコップを受け取り、中の水を一気に飲み干すと、大きく息を吐いた。

尾崎は無言で廊下へ出た。シャワールームへ向かうのだろう。その背中へ、明日もよろしくな、と声をかけた。返事はない。俺と会長は、同時にため息をついた。

「最初はいい感じだったんだけどねえ」

たしかに、技の練習も積極的にやっていた。

「やっぱりあれかなあ、就職の面接で落とされたっていうのが……」

俺はうなずき、そうでしょうね、と言った。

面接でネギ戦隊のことを言ったら、笑われたあげく落とされた。一ヶ月前、そう告げた尾崎の顔は真っ青で、泣き出したいのを必死で我慢しているようだった。それ以来、技の練習もしなくなり、イベントもほとんど欠席。今日現れたのは奇跡に近い。明日も来てほしいが、あの様子では無理かもしれない。

「じゃあ村田ちゃん、大変だろうけど、よろしくね」

そう言って会長は出ていった。俺はやりきれない思いを抱え、またため息をついた。

当初五人だったネギ戦隊は、半年で俺一人となり活動休止。去年の暮れに尾崎が入り、ホワイトとグリーン、二人体制になった。尾崎も就職面接で落とされるまでは、頑張ろうという気概が感じられたのだが……。

明日、春分の日イベントは、尾崎が来なければ中止になる。それでもすべてを受けとめ、うまくやってほしい。それが会長の願いだ。

「そう言われてもなあ……」

一人では意味がない。ネギ戦隊として、ホワイトとグリーンが力を合わせるのが重要なのだ。そうしてこそ、風邪予防にはネギを丸ごと食べるのが良いと思ってもらえる。でなければ、ネギ戦隊など必要なくなってしまうだろう。明日尾崎が来なければ、また活動休止になるかもしれない……。気がつく、またため息をついていた。

俺の父親はスーツアクターだった。子どものころ、父親をテレビで見るたびワクワクして、友達に自慢した。でも信じてもらえなかった。主役は若いイケメン俳優だから、敵と戦うのも俳優本人だと友達は主張した。オッサンにあんな動きができるわけない、というのがその根拠で、俺が口を挟もうとすると、お前のオヤジなんか冴えないオッサンじゃないか、絶対ありえないよ、と友達は言った。

衝撃だった。父親は身体もよく動くし、殺陣やワイヤーアクションも優雅だ。イケメン俳優より何倍もカッコいい。いくら訴えても馬鹿にされる。なぜ信じてくれないのか――。俺は殴りかかり、相手に数針も縫う怪我をさせ、間もなく引越す羽目になった。行く先々で、同じ事態に巻き込まれた。そうではない、俺が事態を引き起こしたのだと言われれば、そうかもしれない。

トラブルになるたび、父親は何も言わず荷造りをして、引越し業者を呼んだ。俺にはそれが理解できなかった。自分はヒーローだ、息子は正しいと、なぜ言ってくれないのか。そう思った。

俺が高校に入ると、父親はスーツアクターをやめた。ヒーローでいてほしかった俺は父親と話をしなくなり、わだかまりを解消できないまま、一人あとに残された。

「なあオヤジ」

俺は天井を見上げた。

「尾崎のやつ、やめちまうのかな……」

オヤジの颯爽とした姿が脳裏をよぎる。

「やめてほしくないんだよ。なあ、どうしたらいい？」

どうしたらいいのか……。俺はうつむき、深くため息をついた。

子どものころ、オヤジは宇宙一カッコいい存在だった。そのカッコよさを友達にも分かってほしい。それだけが望みだった。あのときたった一人でも、オヤジをヒーローだと認めてくれていたら、俺は誰にも手を出さずに済んだ。

勝手な言い分というのは分かっている。だがスーツアクターという仕事の価値を、たった一人でも認めてくれていたら……そうしたら俺は、そいつと無二の親友になれた。今でも、そう思えてならないのだ。

翌日のイベントは無事終了した。客の入りも上々で、会長もほっと胸をなで下ろしたようだ。尾崎は心を入れ替えたとも見え、集合時間よりもだいぶ前に現れた。入念なりハーサルで臨んだイベントは大成功に終わり、子どもたちに向かって手を振る尾崎は、本当に嬉しそうだった。

「村田さん、水くさいじゃないですか」

着替えたあと、尾崎が話しかけてきた。

「何で話してくれなかったんですか」

「何のことだ」

「会長も知ってたんでしょ、人が悪いなあ」

俺と会長は顔を見合わせた。何を言っているのか、さっぱり見当がつかない。

「だからあ、村田さんのお父さんのことですよ」

「オヤジの？」

思わず声を上げると、尾崎は嬉しそうにうなずいた。

「俺、めちゃくちゃ尊敬してて、村田さんのお父さんのこと」

満面の笑みで尾崎は続ける。

「あの人の息子と仕事してるなんて、ホント夢みたいっすよ」

ホント夢みたいっすよ——。尾崎の言葉がぐるぐると回る。

ハツとして、目が覚めた。夢か……。

「尾崎ちゃんが、村田ちゃんのお父さんのこと知ってたって？」

「いやだから、夢ですよ、夢」

何気なく夢の話をしたら、会長は思いのほか喜び、嬉しそうな顔をした。

「本当に知ってたらいいよねえ。村田ちゃんのお父さん、めちゃくちゃカッコよかったよ」

「そりゃまあ、そうですけど。でも——」

「そんなこと、あるわけない？」

俺はうなずいた。尾崎がオヤジのことを知っているなど、考えられなかった。だが……夢の中の尾崎におかしなところはなく、いつも通りだった。細部が妙にリアルで、夢とは思えない。だからといって尾崎がオヤジを知っているとは、やはり考えられないのだが……。

「来ないねえ、尾崎ちゃん」

会長は控室の時計を見て、ため息をついた。そうですね、と言いながら、俺もため息をつく。

「中止にしますか」

うーん、と言いながら、会長は腕組みをした。しばらくして組んだ腕をほどき、会場を見に行くと、戻ってきて、そうだね、と言った。

「お客さん、二人しか来てないよ。五分前なのに」

ため息が出た。わずか一時間で、何度ため息をついただろう。そう思いながら立ち上がった。ヒーロースーツは着ているが、マスクはかぶっていない。身体だけシャワーを浴びて着替えるか……。

「きゃあっ」

女性の叫び声だ。控室から廊下へ出ると、声のしたあたりへ向かう。おそらく会場の外だろう。大きな門をくぐると、女性が倒れていた。すぐそばにタイヤの跡が弧を描くようについていて、倒れた女性とタイヤの跡は、重なっている部分もあった。

「轢かれたのか？」

思わず声に出す。そのとき、村田さん、と叫ぶ声がした。顔を上げると、私服姿の尾崎が必死の形相で走ってくる。俺のすぐそばまで来ると、肩で息をしながら、しっかり覚えましたよ、と言った。

「覚えたって、何を」

「ナンバーですよ、車の」

なるほど、そうか。

「救急車は呼んだのか」

「ええ、もうすぐ来ると思います」

「じゃあ俺が乗っていこう」

尾崎はうなずいて、警察に通報します、と携帯電話を取り出した。そのとき、足元で泣き声があった。見ると、小さな男の子が俺と尾崎の足にすがりついている。しゃくり上げながら、男の子は何かを伝えようとしていた。俺と尾崎はしゃがみこみ、男の子の言葉に耳を傾けた。

「ネギ戦隊みたいにやっつけたかったんだ。ホントだよ。ホントに僕……」

でも、何もできなかったんだ――。そう言って、男の子は大声で泣き出した。突然の出来事にどうしていいかわからず、途方に暮れていると、尾崎がにっこり笑って、男の子の頭を力強くなでた。

「分かるよ、やっつけたかったんだよな」

男の子は泣きながら、それでもうん、とうなずいた。

「もう一度、助けるチャンスだ。もうすぐ救急車が来るから、このおじさんと一緒に救急車に乗って、病院へ行くんだ」

男の子は顔を上げ、しゃくり上げながらも、病院、とつぶやいた。

「そう、病院だ。そしてお母さんに何があったか、お医者さんに話す。最初に何があって、次に何があって、その次は、っていう具合に、順番に話すんだ。どうだ、できるか？」

男の子は尾崎の言ったことを考えているようだったが、しばらくして、力強く、うん、とうなずいた。

「僕できるよ。お母さん助ける」

尾崎はまた男の子の頭をわしゃわしゃとなでて立ち上がり、自分を指して言った。

「おじさんは、お巡りさんに知らせる。君のお母さんがひどい目にあったこと、ひどい目に合わせた車のことも、分かっていることは全部伝えるから」

男の子はにっこり笑ってうなずき、小さな手を差し出した。握手を求めているのかと思ったら、小指以外を曲げて、げんまん、と言った。

「よおし、げんまんだ。約束、な」

うん、と男の子は笑った。もう泣いてはいなかった。

「昨日はお疲れ様。その甲斐あって満員だよ」

「本当ですか！」

尾崎が叫んで立ち上がる。

「ホント、ホント。尾崎ちゃんのおかげだよ」

尾崎は顔をほころばせる。たしかにそのとおりだ。他に目撃者はおらず、尾崎がナンバーを覚えていなければ、ひき逃げ犯は逃げおおせただろう。

会長が広げた新聞には、「お手柄ネギ戦隊 ひき逃げ犯逮捕に協力」と見出しが出ていた。地方紙とはいえ、一面に載る意味は大きい。そのおかげでイベントは大盛況、昨日まで閑古鳥が鳴いていたとは思えないほどの変わりようだ。変わりようといえば、尾崎だ。昨日といい今日といい、まるで別人だ。

ちえ、何だよ調子狂うじゃねえか、俺だって――。思わず愚痴がこぼれそうになる。だが嬉しそうな尾崎の顔を見ているうち、まあいいか、と思えてきた。せっかくやる気になったのだ。水をさすことはない。

「昨日はあんなことがあって中止になっちゃったけど、新聞にも取り上げられたし、結果オーライって感じだよねえ」

俺も尾崎もうなずいた。会長の言うとおりだ。

「でも尾崎ちゃん、なんで急にやる気になったの？」

もっともな疑問だ。尾崎は照れくさそうに頭をかいた。

「実は――」

おととい会った声優とアドレス交換をして、最初に受け取ったメールに、ネギ戦隊カッコいいね、と書いてあった、らしい。

「それだけ？」

「それだけ、って――」

ふてくされたのか、尾崎は仏頂面になった。

「まあまあ、会長。カッコいいね、って女の子に言われたのが嬉しかったんじゃないですか」

「そうなんですよ！ さすが村田さん、よく分かってますねえ」

内心、おい、とツッコミを入れたかったが、当たり障りなく、はは、と笑った。

「ホント、僕が師匠とあおぐ人の息子だけのことはありますね」

え……。

「今、なんて……？」

「へ？」

ぼかんとした顔の尾崎に、俺は詰め寄った。

「今なんて言ったんだよ！ 僕が師匠とあおぐとか何とか——」

ちよっとちよっと村田ちゃん。会長の声が聞こえたが、俺はなおも尾崎に詰め寄った。

「師匠とあおぐって誰のことだよ、言えよ、言えってんだよ」

村田ちゃん！ 会長が大声を出す。ハツとして尾崎を見ると、ひどく怯えた顔をしている。

「落ちついて、ね」

俺は尾崎から手を離し、すまん、と謝った。

「で、何だって？」

会長に問われても、尾崎はまだぼかんとした顔だ。

「僕が師匠とあおぐ人の息子とかって言ってたでしょ。あれ何？」

ああ、とようやく思い出したように、尾崎は俺に言った。

「動画サイトですごい人見つけたんですよ。スーツアクターなんですけど、めちゃくちゃすごい人で、その人が村田さんのお父さんだって知って、ホントびっくりでしたよ。なんで言ってくれないんですか、水くさいじゃないですか！」

「だってさ。よかったね、村田ちゃん」

……目の前がぼやける。俺は二人に背を向け、天井を見上げた。二日前、やはり天井を見ながら、オヤジに相談したのを思い出す。

オヤジの仕業かよ……。

目を閉じると、オヤジの颯爽とした姿がまぶたに浮かぶ。子どものころ、ワクワクしながら見ていた、いちばんカッコいいオヤジの姿……。その姿も次第にぼやけ、目と鼻の奥がつんと痛んだ。

会場から、俺たちを呼ぶ声がする。身体じゅうに力がみなぎった。俺は大きく息を吐き、二人のほうへ向きなおる。

「一丁やってきますか」

尾崎は俺にウインクをして、ヒーローマスクをかぶった。くそっ。カッコつけてんじゃねえよ。

「ちゃんとあとから来てくださいよ」

「分かってるよ！」

尾崎のやつ、一丁前のこと言いやがって。

「お前こそ、簡単にやられんじゃねえぞ。俺が行くまで持ちこたえとけよ！」

尾崎は振り返り、右手を上げた。いちいちカッコつけんじゃねえ、と心の中で悪態をつき、尾崎、いやネギホワイトを見送る。ネギホワイトは世界を救うべく、小走りに敵のもとへ急ぐ。その姿は、ヒーローそのものだった。

「なあオヤジ」

俺はつぶやいた。

「ヒーローって、カッコいいな」

そうだ。ヒーローはカッコいい。どんなヒーローも、例外なく「カッコいい」。そのカッコよさは、誰にも分からないかもしれない。でもいいじゃないか。ほかならぬ自分が認めているのだ。

「オヤジ……」

こらえていた涙が、ほとぼしるように溢れだす。同時に嗚咽がもれた。

「オヤジ、俺――」

そこから先は、言葉にならなかった。代わりに心の中でオヤジに言った。

オヤジのこと、ずっと自慢だったよ。今でもオヤジは、俺のヒーローだよ……。

「ネギグリーン！ 早く来て！」

両のこぶしをぎゅっと握り、会長を見る。会長は右の親指を立て、笑顔を見せた。俺も笑顔で右の親指を立て、ヒーローマスクをかぶった。

おわり

ネギ戦隊タベルンジャー

<http://p.booklog.jp/book/90334>

著者：比良岡美紀

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/90334>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/90334>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ